

---

# 君が還る場所

大豆のススメ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君が還る場所

### 【Zコード】

Z4826A

### 【作者名】

大豆のススメ

### 【あらすじ】

ある日公平は死んだはずの幼馴染、真美と会つ。戸惑いながらも、公平は真美と同じ時間を過ごしていく。

そのとき、僕は悲しいというより先に、納得していた。

だから真美は、僕たちの前から逃げるようにしていなくなつたんだつて。

だから真美は、僕たちに何も言わなかつたんだつて。  
きっと、それは僕たちにも真美にもどうすることも出来ないことだつたんだ。

真美が死んだと知ったとき、僕は漠然とだけど死というものがなんのか理解することができた。きっと、死というものはその人と僕たちとを切り離すための道具なんだ。

誰かが死んだら、その人とその人に関わった人たちは切り離される。だから、死んだ人は僕たちと同じ場所にとどまることはできない。死は、僕たちからも、そして死んだ人からもつながりを奪つていいく。

真美とのつながりがなくなつた。

そう感じたとき僕は初めて泣いた。

\* \* \*

「馬鹿ねえ、泣くことないじゃない」

「だつて、真美……」

「大丈夫。私がいなくたつて、浩太には公平がいるわよ」

そう言つて真美は、少しほなれたところに立つていてる僕に視線を向けた。

「ね、公平」

「うん」

僕は悲しみを隠すのに必死で、つまらなそうに、そこに立つて、  
る演技をすることしかできなかつた。

「私、もう行かなきや」

「待つてよ！ 真美がいなくなるなんて嫌だよ！」

浩太は聞き分けのない子供のように声を上げて泣き出した。僕も、  
浩太と同じ気持ちだつた。

「私だつて」

真美はそう呟いて、下を向いた。しばらく無言でそうしていた真  
美は、不意に顔を上げると、浩太に抱きついた。背の低い浩太の顔  
は、真美の胸に埋まつていた。

「私だつて嫌だよ。ずっとここにいたい。浩太と、公平と、ずっと

一緒にいたい」

「だつたら！」

そつと浩太から体を離した真美は、顔を背けて小さく声を出した。

「駄目なの」

「どうしてだよ！」

「浩太」

僕の声に浩太は顔を上げた。涙でぐしょぐしょになつた浩太の顔  
に目をやつてから、僕は真美を見つめた。

「別に今生の別れつてわけじゃないよ。今は辛いかもしれないけど、  
いつか、僕たちはまたいっしょになれる」

真美は顔を上げた。僕は、真美と目が合つと小さくうなづいてか  
ら、言った。

「そうだよね、真美」

「……うん」

真美も小さくうなづいた。そして、涙を拭いながら僕の前まで來  
ると、浩太にしたように、僕に抱きついた。

真美の腕が、僕の首筋に絡まつて、きゅっと締まつた。かすかな

圧迫感とぬくもりが、僕の全身を包み込んだ。

「お願い、公平」

僕の耳元で真美は呟いた。

「浩太のこと、ちゃんと見ててあげてね」

「うん」

「いつまでも泣いてたら、励ましてあげてね」

「うん」

「……ごめんね」

最後に真美はそう呟いた。僕は何も言えずに、ただ真美の細い体を受け止めていた。

やがて、僕から離れると、真美は本当に最後のさよならを言って、僕たちの前からいなくなつた。

「待つてよ！ 真美！」

浩太のかれ果てた声だけが、森の中を虚しく響いていた。

沈みかけた夕日をバックに、一列縦隊に並んだ野球部の部員達がグラウンドの周りを走っていた。オレンジ色に染まつたグラウンドの片隅を彼らの影がゆらゆらと縫つていく。

僕は、彼との会話を戻るために、描きかけのスケッチブックから顔を上げた。

「四年ぶりの再会」

彼は、別段感情を込めた風もなく、そう言った。

「そうだね」

僕も彼の真似をして、感情を込めないように努めて、声を出す。だが、それも上手くいかず、僕は肩をすくめて、描きかけのスケッチブックに目を落とした。

「確か」

そう言って、彼は言葉を止めた。おそらく、僕が顔を上げるのを待っているのだろう。彼の言葉にゅっくり顔を上げると、図つていたように彼は続きを口にした。

「四年前にいなくなつたお前の幼馴染、だよな」

いなくなつた、という言い回しは、彼の気遣いだった。

「幼馴染、じゃないんだけど」

僕はそう言ってから、ふふ、と笑つた。

「彼女が死んでからや」

死んだ、という言葉に、無愛想な彼の顔がピクリと揺れた。多分、氣を遣わなくていいよ、とは伝わったと思つ。

「初めてなんだ。あの頃の夢を見たの」

「そうか」

彼はそれだけ呟くと、僕の心中を察したように、虚空に目を留めた。これだけ、僕の話を真面目に聞いてくれるのは、彼以外には多分いないだろう。

うん、そう。僕はそう呟いてから、スケッチブックを閉じた。ぱたん、という音が、僕と彼以外誰もいない教室内に、妙に大きく響いた。

「よくは知らないけど」

彼は虚空を見つめたままその声を出すと、ゆっくりと僕に視線をなぞった。黒ぶちの野暮つたい眼鏡には合わない、彼の整った顔立ちは、相変わらず無表情を作っていた。

「そのことに、何か意味があると思うか？」

「どうだらうね」

それが正直な答え。そして、彼の予想していた答えだと思つ。

「じゃあ、会つてみたいとは思うか？」

ただの質問も、彼が口にすれば、それは試されているよつの気がしてくる。彼は、僕なんかよりずっと世の中を知つてゐるし、絶対的な自分の世界を持つてゐる。だから、彼はその姿端麗さにはそぐわない扱いを周りから受けっていた（放課後の教室に、僕と二人つきりでいることからもそれは明らかだ）。つまり、彼の目から放たれる特別な光線は、特徴であつて特性ではない。だからこそ、彼は別に僕を試しているわけでもなかつた。

「それは、夢の中じやなくて、つてこと？」

「ああ」

あくまでも、どこにでもある日常会話でのほんの一節にすぎない。つまりはそういうことだ。

力チカチカチ……。

時計の針は確実に時を刻んで、小刻みな音を奏でていた。

僕は、目を閉じてその音に耳を傾けた。

もし、この時を刻む音をさかのぼることができるなら。

目を開けると、変わらず光線を放つてゐる彼と目が合つた。僕は、一度彼から目をそらして、もう一度そこに目をやつた。

「一つだけ、どうしても彼女に伝えたいことがあるんだ」

「そうか」

彼は、何も追及せずに、また虚空に手を留めた。彼には、つまり、どういうことかをいちいち説明する必要はない。だから、僕は彼にいいづらいことでも何でも話すし、彼も無表情で真面目に、何でも応えてくれる。

遠くもなく、近くもなく。限りなくあいまいなところに手を留める彼の横顔を僕は眺めた。

どうがんばっても、彼の瞳に映るものを見ることは出来そうになかつた。

例えば、数年ぶりのこととで、確かに顔は知ってるけど、名前がどうしても思い出せない相手に、親しげに声をかけられたときとか。もしくは、名前は知ってるけど、数年のときを経て、別人のようになつてしまつた相手に、親しげに声をかけられたときとか。分かりやすく言い換えるなら、今の状況は、そんな感じに似ていた。

「えつと……」

僕はとりあえず、彼に困惑してることが伝わるよう、後頭部に手を置いた。

「ごめん」

これも、とりあえずの行為。

「えつと、つまりあの時の会話の続き、ってことだよね」

馬鹿みたいに確認して見せる僕に、彼は「ああ」とだけ言って、ふいっと顔をそらした。別に気を悪くしたわけじゃない。彼にどつては、それは僕への最低限の気遣いでもあり、礼儀のようなものだつた。

「ちょっと、気になつてな」

彼は無表情のまま、そう声を出した。

そう。つまり、ただ単にそれだけのことなのだ。つい一時間ほど前に交わした会話が脳みその端っこに引っ付いて離れない。そのままでは気持ち悪いから、彼は帰りの道中、肩を並べて歩く僕にそれを吐き出した。

ただ、彼の場合「そろそろ、お前がさつき教室で言つてたことだけさ」「という前ふりを活用できずに、「どうしても伝えたいことがあるつて言つたよな」となつただけの話だ。

ただ、僕が戸惑つてしまつるのは相手が彼だからこそだ。もし隣にいるのがものすごく頭のいい、人語を理解するサルでもこんなに驚きはしなかつたと思う。彼が、一度終わつた会話を掘り返してなお、

気になつていていたといふのは、それぐらいありそうもないことなのだ。

「気になるつて言つのは、つまり

僕が声を出すと、彼は目だけを僕に向けた。

「彼女に伝えたいことが、なんなかつてこと?」

「そうじゃない」

だらうね、とはもちろん口には出さない。そんな私的なことを詮索してくるほど、彼は無粋でもないし、知りたがりでもないことを僕は知つていた。

「伝えたいことがあるつてことは、そつなつてほしいといふことだ

「うん。まあ、そうなるね」

「だが、お前はそつはならないと思つてゐる

「うん」

「それが気になる」

申し訳ないとは思つ。それでも僕は後頭部に手を置いた。

「言いたいことがよく分からんだけど」

「お前が、そつならないと思つてゐることが、引っかかる

うん。つまり?

「つまり、そつならないと決め付けるのはおかしいといふことだ」  
彼は僕の顔から、もつとも僕の知りたがつてゐる答えを読み取つて、それに答えてくれたみたいだつた。ただ、理解することと、納得することは別次元のことだ。少なくとも、彼の放つた言葉は、僕を混乱させるには十分な威力を持つていた。

しばらく、僕は足を動かすことも忘れて、彼の顔を凝視した。

「大丈夫か?」

心配する、という意味を彼は知つてゐると思つ。ただ、彼の場合、その意味が声にも表情にも出てこないだけだ。つまり、今の彼は相変わらずの彼のままであり、今彼の口から出た言葉も、「冗談や、からかい」というたぐいのものではない、ということだった。

「じめん」

一度目の謝罪に、彼はうんざりしたように肩を軽く持ち上げた。

おそれく、彼の世界から見た僕は相当ずれていたのだ。

「こんな言葉を聞いたことはないか？」

仕方ないから、分かりやすく説明してやるよ。とこりといひだらうか。

彼はもつたいぶつたよに、一度僕から目をそらした。その間に「馬鹿馬鹿しい」と口に出してその場を後にすることもできたけど、僕はその場から動かなかつた。どう間違つたとしても、彼が馬鹿馬鹿しいことを口に出すとは思えなかつた。

彼は虚空に向けた目を僕に戻して、僕がそこに留まつたままでいることを確認した。それから、小ちくづなずいて見せて、彼は言つた。

「人が空想できる全ての出来事は起こりつる現実だ」

「つまり？」

「つまり、お前がそうしたいと思つていいなら、それは起こりつる現実だということだ」

「なるほど……」

やつぱり、理解はできても納得はできなかつた。でも、彼は僕に納得させるためにこいつして一度終わつた会話を掘り返した上に、惜しげもなく自分の世界の一部をさらけ出して貰つてやつた。このまま、納得したふりをしてしまつのは、あまりにも彼に対して失礼だらう。

「言つてることは分かるけど」

それは癖というわけじゃない。ただ、そうすることが一番相手に自分の心理状況を判りやすく伝えることができるだらう。と思つので、僕は後頭部に再び手を当てた。

「それは、ありえないことだと思つ」

「どうしてだ？」

「どうしてだ？ 僕は自分に問いかけた。

「そうだな。少なくともこの四年の間にさうこいつとはなかつたからね

それらしいと思い当たることも。そう付け足して、僕は続けた。

「だから、ただあの頃の夢を見たってだけで、そんな都合のいいことが現実に起ることはあるえないと思つ」

確かに。彼はそう呟いた。

「お前の言つてることは、道理にかなつてる」

「うん」

「ただ、それがすべてなわけじゃない」

確かにそのとおりだと思う。世界は、僕の知らないことで満ち溢れているし、それがあるべき姿なのだ。でも、そのすべてなわけじゃないものを僕は知らないし、体験したこともない。彼の言つていることは、確かに存在している、別世界のことだ。

「でも、そのすべてじゃない一部を、僕は今まで知らないで生きてきた」

「すべてじゃない一部、じゃない」

彼は珍しく、僕の発言を否定した。

「この世界には、道理には決して收まりきらないものが多く存在している」

そして。彼はそう呟いて、天を仰いだ。

「俺たちは、すべてじゃない一部の中でも生きてるんだよ」

＊＊＊＊＊

彼と顔を合わせることになつたのは、多分、初めからそうなることになつてからなのだろう。毎年一年ごとに行われるクラス替えが、成績やら、普段の素行やら、その他さまざまなサンプルを元に、厳正な審査を得て出来上がつていようと、生徒一人一人の名前の書かれた紙を一つの箱に閉じ込めて、そこから適当に担当の教師が一人一人を割り振つていたとしても、それは変わらない。僕たちは、気の遠くなるような、天文学的確率の難関を知らず知らずのうちに突破して、必然的にそこに割り振られてもいたし、単にたまたまそこに割り振られてもいた。

すべてのことには、偶然も備わつているし、必然も備わつている。ただ、そのどちらか一つが単独で物事に働きかけることはない。僕たちは、偶然と必然の狭間で揺れ動き、結局は、そのどちらにも引き寄せられて生きているんだ。

お前たちはもう三年生だ。毎日のよつに聞かされる言葉は、変わることもなく教室に響いていることだろう。

「もう一年生とは違うんだ」と当たり前のことからはじまり、五分もすれば、「もう受験まで時間はないんだ」に発展し、十分も経てば息を切らして、そこに戦争を持ち込んでくる。

それが、進学校の三年生を担当する教師としての義務だとしても、

やつぱり僕には、朝の貴重な十分間をそんなつまらないことでつぶす気にはなれなかつた。少なくとも、息を切らしながら、秀原のみ声を聞くために教室に駆け込むよりは、ふかふかの布団の上で、ちょっとだけ長く夢の中にとどまつてゐるほうが、ずっといい。どう頭をひねつてみたつて、僕には夢の中のほうが魅力的に映る。

だからといって、秀原を否定しているわけじゃない。その半分以上皮膚に侵食されたおでこも、ドラえもんの出来損ないのような体型も、すべては自分のことを省みずに、二十年以上も生徒たちに変わらぬ情熱で接してきた何よりの証なのだろうから。

その勲章を武器に秀原は生徒たちに正論を投げつける。そして、僕以外のみんなはそれを、そつなく器用に受け取つて、本人に気づかれないようにそつと捨てている。

投げつける、受け取る、捨てる。

やつぱり、僕には朝の十分で秀原の講義を買う気にはなれなかつた。かといって、十日もそれが続けば、いい加減目をつぶつてゐるわけにはいかないらしい。

「森本、それと加藤。お前たちはちょっと残れ」

秀原のその言葉で、ようやく一日の授業から開放された生徒たちのざわめきは、ぴたりと止んだ。いつもなら、だらだらと教室に残つて話し込む数人の生徒は、教台の前で仏頂面をして立つてゐる秀原と指名された僕たちを交互に見てから、そそくさと立ち去り、教科書を開いてそこに目を落としていた数人の生徒は、はいはい、勝手にしてくださいよ、という具合に、無言で帰り支度を整えると、すたすたと教室から出て行つた。

やがて、教室に僕たちだけが取り残されると、秀原は仏頂面を維持しながら、声を出した。

「どうして残されたのかは、分かるな」

僕たちの返事を待たず、秀原は続けた。

「ただの遅刻でも、内申書には大きく響くんだ。お前たちは、まだこれ以上自分の首を自分で絞めるつもりか？」

初めは僕をにらんでいた秀原の視線が、斜め後ろへと注がれる。その時点で、ようやく僕はこの忠告が僕だけになされているものではないことに気づいた。

自分の首を自分で絞める変わり者は、ビリやせら僕だけじゃなかつたらしい。

秀原は一通り説教を済ますと、捨て台詞に「もしこれ以上こんなことが続くようなら、こちらにも考えがあるからな」とはき捨てて、教室を出て行った。

僕は秀原の吐き捨てた、考えというものを少しの間、頭の中で思い浮かべた。それが、毎朝家まで押しかけてくるといつものにせよ、そうじやないにせよ、これ以上このままを続けていると面倒くさいことになりそうだつた。

とりあえず、やることはなくなつた。秀原の説教も終わつたし、その後物思いにふけるにしても、これ以上ここに残る必要はなかつた。それでも、僕が席を立たなかつたのは、斜め後ろにいる彼が気になつたからだ。

秀原が出て行つてから、十分弱。これ以上席を動かすに、何の行動も起こさないのはさすがに不自然だつた。

「あ……」

わざとらしくため息をついて、僕はチラッと彼の様子をうかがつた。何の反応も返つてこなかつたので、今度は体ごと彼のほうを向いてみせる。

「はあ……」

一度目のため息。それも彼の耳には届かなかつた。彼の目には僕の姿が全く映つてはいないのかもしれない。人間の目の構造を考えれば、おそらく彼の視界の端っこぐらいには僕は映つているはずだけど、彼は見事な演技でそれをなかつたことにしようとしていた。

早く帰れよ。そう言われているのはもちろん分かつてゐる。でも、それをここでしてしまうのは、あまりにも不自然なような気がしたし、ため息でつないで無理やり自分の存在をアピールするのも間抜

けな気がした。

「おい、用がないならさつさと帰れよ」

彼にそう言われてから席を立つのが、一番自然な形だろ？

「どうした？」

いつの間にか、彼の視線が僕に向いていた。いつの間に、こうなったのだろう？

「どうした？」

僕は彼とまつたく同じ会話を吐いて、彼に目を向けた。今の状況が上手く把握できなかつた。

つまり、用がないならさつさと帰れよ、ということだらうか。一番自然な形で僕をここから追い出してくれる、これは彼の無愛想な好意。そう受け取ればいいのか？

「どうした？」

彼は少し待つてから、もう一度同じ質問をしてくれた。

「どうした？ 用がないならさつさと帰れよ。」には聞こえなかつた。つまり、彼の目には本当に僕が映つていなかつただけのことなのかもしない。もし、視界の端に留まつていたとしても、ただ単に気づかなかつただけ。そして、ため息も耳に入らなかつた。それなら、彼の疑問符の浮かんだどうした？ も納得できる。

自分のほうに体を向けて、変にうつむいてる奴がいる。なんだろう？ 用でもあるのだろうか？

「どうした？」

「うん。無理がない。」

「……」

納得した時には、すでに彼の質問に対する回答権はなくなつていた。質問の答えを考えるにしろ、一分は長すぎるだろ？ 彼はすでに僕から顔をそらして、窓の外を相変わらず背筋をぴんと伸ばしたまま、眺めていた。

「あつと……、君も？」

彼は一いち方に顔を向けてくれた。どうやら、気長に待ってくれて

いたみたいだ。

「なにがだ？」

「君も、秀原の講義をサボってたの？」

彼は僕の目を確かめるように見た後に、ゆっくり目をそらして「ああ」と呟いた。

「でも、僕が教室に入ったときには、君は席についてるよね」

「ああ

「僕よりも少ししだけ早く来てたってことかな」

「ああ

「残念だな」

彼は、なに？ とは声に出さず僕に顔を向けた。変わりに僕は、だつて、と声を出した。

「もし君がもう少し遅くて、僕がもう少し早ければ、僕たちは今頃、秀原の欠点を十個ぐらい挙げて、笑い合ってたかもしれない」

彼は少し考えるよううに僕から目をそらしてから、再び僕に視線を戻した。

「確かに、そうなつていたかもしれないな

「うん」

それも悪くない。だろうか？

「それで、君はどうするの？」

「なにがだ？」

それはつまり、お前はどうするんだ、といふことだらう。

「とりあえず、僕は明日から一〇分早起きする」とになるけど

君は？

「そうだな

彼は小さく唇をゆがませて「とりあえず、」そのまま様子を見てみる」と言った。

「本気？」

「気になるだろ。あいつの言つてた考え方つが  
僕は少し考えるふりをして、視線を上に向かた。

「確かに」

それが、毎朝家に押しかけてくるものなのか、それとも、それ以外のものなのか。

「気になるね」

視線を彼に向けると、彼は小さくうなずいて、言った。

「あいつなら、やりかねない」

「確かにそうだし、できれば確かめてもみたいけど、それは止めたほうがいいと思うよ」

「どうしてだ?」

「そうすると、君が主犯格ってことになる」

彼が目を細めるのを見て、僕は言った。

「気づかなかつた? 僕たちは今、共謀してストライキを起こしてるんだ。我々に穏やかな朝の10分をーーってね」

「ああ」

彼は煩わしそうに頭を一度かいた。

「そういえば、そうだつたな」

「こればかりはどうしようもないね」

「そうだな」

「考え方になつた?」

「考え方とくよ」

「ああ、そう。」

とりあえず、これ以上会話を引き伸ばすのは不可能に思えた。もう彼から僕に声をかけてくることはないだろうし、僕からも、彼にかける言葉は一つしかない。

「そろそろ、帰る?」

僕は言った。

「そうだな」

彼はうなずいて立ち上がった。

「一つ、聞いてもいいか?」

教室を出ようとアをぐぐりとしたところで、彼の声は響いた。

振り返ると、自分の席の前から彼は一步も動いていなかつた。

「俺は、お前と一緒に帰るのか？」

決して、それが嫌だといつてゐわけじゃない。遠まわしに勘弁してくれ、といつてるわけでもない。だからこそ彼の周りには人が集まらないのだろう。

僕は考えるふりをしてから、視線を上に向けた。彼に目を戻すと、

彼は真剣な目で答えを待つっていた。

「まあ、そうなるだろうね」

彼の第一印象は、品がよくて育ちのいいお坊っちゃん、だった。多分、誰が彼と顔を合わせても初めはそういう印象を抱くだろう。そして、彼と三十分同じ時間を過ごせば品がよくて育ちのいい無口なお坊っちゃん、となり、もうさらに三十分過ごせば品がいいわけじゃない育ちのいいわけじゃないお坊っちゃんでもない、無口な人間、になる。でも、あくまでそれは中間距離から観察した場合の彼の人物像でしかない。遠距離から見た彼が品がよくて育ちのいいお坊っちゃんであり、中間距離から見た彼が無口な人間であるなら、当然、近距離から見た場合も彼の人物像は変わってくるだろう。

初めて顔を合わせてから、半年。ようやく彼は僕にその姿をチラッとだけ見てくれた、ということになるのだろうか。

「俺たちは全てじゃない一部の中で生きてるんだよ」

彼のその言葉を聞いたとき、僕はなるほど、と思つた。

半年間、いくら目を凝らしても見えないはずだ。彼の見ている世界は、僕が十年前に置き忘れてきた世界と同じだつたのだ。

そこでは誰でもスーパーマンになれるし、仮面ライダーにだってなれる。現に僕は小学校一年生の時の夢はウルトラマンになることだつたし、それが叶うものだと本気で信じていた。

ウルトラマンになれる。

もちろん、彼は実際にその確率が人類の歴史をぐるっと一回りしても叶いそうもないほど、途方もなく低いものである、と理解はしているだろ？ この世界で生きて、僕と同じ高校に通つているのがその証拠だ。でも、彼は全てじゃない一部、の外に目を向けることができる。だから、それがあり得ないことだとは考えない。

「そうならないと決めつけるのはおかしい

ふむ。

「お前がそうしたいとおもつてゐながら、それは起つてゐる現実だ」

ふむ……。

忘れていた。ここより、思い出す機会がなかつただけのことだつた。そういえば、ふと、やつ思ひと、それは自然に僕の頭の中に浮かんでいた。

そういえば、真美も全てじゃない一部、の世界に田をむけていたのかもしれない。

\* \* \*

\* \* \*

「もし、よ?」

「なに?」

「もし、私が死んでここからいなくなつたら、公平はどうする?」

もし、だけのまえふりの後、真美はぶしつけにそんなことを言った。

「もし?」

確認してみせると、真美は肯いた。

そう。もし。やつ恤つて。

「とつあえず、三日間はまつとじてるかな」

「まつと?」

「うそ」

「じゃあ、三日経つたら?」

「一週間泣きはらして、すつぱり忘れる」

むつと眉を寄せて、真美は僕をにらんだ。僕は苦笑して

「もし、だろ?」

と言つた。

「じゃあ、もしやつなつたら

」

「もし？」

僕の声には田もくれず真美は言った。

「私に会いたい？」

そして、確かめるように僕を見つめた。

彼と別れてから僕はまっすぐ家に帰った。

駅から徒歩三十分。

しゃれた店が窮屈そうにひしめき合つた通りを抜け、派手な看板をいくつも掲げたみすぼらしい商店街を抜け、我が物顔で立ち並ぶ住宅地の端っこから少し先に、そのマンションは建てられていた。狭い土地に無理矢理押し込めるように建てられたマンションだった。目の前には駐車場の代わりに小さな公園があり子供たちが無邪気に遊んでいる。僕は全体をモスグリーンに染められた、五階建てのマンションの入り口の前で足を止めた。チラッとだけ子供たちの悲鳴にも似た叫び声に目を向けてから、やることもなく部屋に向かう。

2DKのその部屋は父親と一人で住むには十分な広さだった。僕は自分の部屋に戻ると部屋着に着替えてから、パイプベッドの枕元に無造作に置かれた目覚まし時計に目を向けた。目覚まし時計は僕と目が合うと口をへの字に曲げて

「五時四十分だよ。見りや分かるだろ」

と不機嫌に時間を教えてくれた。

「もうすぐ六時か……」

そう呟いて目覚ましに目を留める。すると、目覚ましは、背中から甲高い音を鳴らした。

「んだよ、文句あんのかコリラー。」

「そんなことないけど」

僕はそう呟いて頭をぽんと押した。すると、目覚ましはぴたりと怒鳴るのをやめた。

「それならいいんだよ。ほら、さっさと行つてきな  
確かにそんな声が聞こえた。僕は苦笑してから

「ああ」

と返事をした。

さて。

これからやることは決まっている。テレビをつけてキッチンの冷蔵庫からお茶を出して一口だけ飲む。飲んだらそれをしまって、五分間テレビを眺めてから結局はテレビを消して外に出る。

いつものことだ。そう、ただの習慣であり、意味のないこと。

僕は小さく息を吐くと、部屋のテレビをつけた。キッチンに入り冷蔵庫からお茶を取り出してそれを飲むと、部屋に戻ってパイプベッドに座ってテレビを五分間眺めてからため息をついた。

ちらりと田覚ましに目を向ける。

「ほれ、行くんだろ」

そう言つてゐるような気がしたけど、それは違つたかもしれない。田覚ましの口はすでにあり得ない方向を向いていた。

僕はテレビを消すと、玄関に向かつた。

いつものことだ。そう、ただの習慣であり、意味のないこと。

（）

「あ  
「あ」

外に出ると、ちょうどマンションに入ろうとしていた美咲さんとばったり顔を合わせた。僕たちは同時にお互いの顔を確認してから、同時に声を出して、同時に笑いかけた。

「出かけるの？」

「ええ、そここの本屋まで」

「参考書？」

「漫画です」

美咲さんは上手に眉をつり上げて

「『』『』」

と僕の頭を小突いた。

「受験生がなに言つてるの」

「戦士にも休息は必要ですから」

「この時期に休息をとる戦士がいるかしら？」

僕は少し考える振りをしてから言った。

「（）」

美咲さんの手をひょいとかわしてから、僕は美咲さんの左手に田をやつた。僕の視線に気付いた美咲さんは、買い物袋を提げた左手を軽く持ち上げて言った。

「カレーよ

「まだですか？」

少しだけ殺氣のこもった攻撃。それが空をきると美咲さんは、もう、と悔しそうに声を出した。

「まだですか？ やつたあつて言おつとしたんですよ」

「よく言つわよ

「ほんとですよ。美咲さんのカレーなら毎日だつて食べられます

「なるほどね」

「なんですか？」

「今までそういうやつて女の子を口説いてきたわけね？」

「よしてくれださこよ」

「そう言つて僕は買い物袋に手を伸ばした。

「重いでしょ。持ちますよ」

「なるほど」

「怒りますよ」

まあ怖い。美咲さんはいつも言つと胸に手を置いて、手をパチパチさせた。まるで下手な役者見習いがやるような演技も、美咲さんがやると高度な演技に見えてしまう。

「大丈夫よ」

ふふ、と笑つて美咲さんは言つた。

「残念ながらカレーの材料しか入つておりません」

「それは残念ですね」

「あら、私のカレーなら毎日でも食べられるんでしょ？」

「いえ、僕が言つてるのは美咲さんの部屋に上がり込む口実がなくなつたことですよ」

四度目の攻撃はうまくかわせなかつた。美咲さんは僕の頭をとらえると、うれしそうにガツツポーズをとつた。

僕は苦笑して

「じゃあ、僕はそろそろ」と言つた。

「あ、うん。『めんね、引き留めちやつて』

「じゃあ、行つてきます」

そう言つて背を向けた僕に美咲さんは、あ、と言つて声をかけた。

「なんですか？」

顔だけを後ろに向けた僕に、美咲さんは言つた。

「うん。その……雨、降りそuddtたから

僕は顔を上げた。確かに、いつの間にできあがったのか、そこにはどす黒い雲が見渡す限りを我が物顔でのさばっていた。

僕は美咲さんに目を戻して言った。

「大丈夫です。本屋すぐそこだから」

美咲さんは何かを言いかけようとして止めた。それを悟られまいと動かしかけた唇を無理に持ち上げたせいで、美咲さんの笑顔は微妙に形を失っていた。

僕はその笑顔に笑みを返して言った。

「じゃあ

「うん」

子供達の悲鳴は絶えることなく響いていた。

美咲さんは僕たちとほぼ同時期にあのマンションに越してきたらしい。ということは、僕たちはもうかれこれ五年のつきあいということになる。

基本的に僕も父さんもあまり人付き合いは上手じゃない。いや、上手とか上手じゃない以前の問題で、僕たちは親子そろってそういうことには無頓着なだけだった。でもまあ、お隣の人へ挨拶をする程度の常識は持ち合わせていた僕たちは、引っ越ししてきたその日に、その町のデパートへ足を運んだ。

高級すぎず、それでいて安すぎず。日に一度ぐらい顔を合わせたときは愛想笑いをして、挨拶をかわす程度のお隣さんに贈る愛想だけの贈り物。　僕たちは、一通りデパートの中を回つてさんざん頭を悩ませた挙げ句、一千円の何かよく分からぬ詰め合わせを買つた。

もし、隣に住んでいるのが一人暮らしの若い女人だと分かつていれば、それは、複雑な種類の中から適当に選んだ防犯グッズになっていたかもしれないし、痴漢撃退用の一度目に受けねば地獄を

見る特殊なスプレーの詰め合わせになっていたかもしない。結局僕たちは何かよく分からぬものか、気の利いているようでは実はそうじゃないものを贈る羽目になつていていたのだ。

きれいな人だな。それが愛想笑いをして、父さんから包みを受

け取る美咲さんを見て一番に感じたことだつた。飛び抜けて美人と  
いつわけじゃないし、身につけているものも少し控えめで周りに見  
せるためのようなものじゃなかつた。多分、美咲さんと町ですれ違  
つたとしても僕は振り返つて見るようなことはしないだろう。

笑つた時にできる小さなえくぼとか、控えめな態度で笑顔を振  
りまじて父さんと話すところとか、多分、そういうところに僕の目  
は向いていたんだと思つ。

それから僕たちは田に一度ぐらい顔を合わせたときは愛想笑い  
をして挨拶をかわす程度のお隣さんから、田に何度も顔を合わせる  
と立ち止まって少し会話を交わすお隣さんになり、「冗談を言い合う  
お隣さんになり、放つておくとコンビニ弁当だけで済ますお隣さん  
の為に、栄養配分を考えた夕飯のおかずを毎日届けてくれるお隣さ  
ん、へと変わつていつた。

もし僕たちが美咲さんの隣に越してこなければ、僕たちは顔を  
合わせても愛想笑いを浮かべた挨拶だけで通り過ぎることになつて  
いただろうし、今頃は栄養失調になつてもいただろう。

一步間違つていたら僕も父さんも、今頃は生きてはいなかつた。  
つまりはそういうことだ。

十分も経たないつちに、空から「ひめお」声は雨に変わっていた。

僕は、近所の中学校の裏を通り、獣道をさらに奥に進んだ。

通称、迷いの森。初めてここに僕を連れてきたとき、浩太は僕に「もう教えてくれた。

「うん、迷いの森。僕が生まれる前からあって、ずっとそういう呼ばれてるらしいよ」

「やれやれ……。

森の鳴き声と雨が木々を叩く音が、まるで呼吸をしているみたいに、どこからともなく響いていた。

「この森全体が一つの生き物であり、僕はそのおなかの上に立っている。そんな感覚を覚えるのは、あの頃も今も変わらなかつた。僕は落ち葉や枯れ枝を踏み分けながら、狭い一本道を歩いた。

「ふふ、誰も知らないんだよ。知つてるのは僕と真美だけさ」

そう言つて、浩太は僕をそこへ案内してくれた。

「ここだよ。これをどけるとね」

等間隔に背の伸びた木。その間に生えた名前の分からない植物は、体のいたるところから触手を伸ばして胞子を飛ばしていた。その植物をかき分けて僕は奥へと進んだ。雨のせいで視界はほとんど遮られていた。見えないとこから冷たいものが僕の首の後ろや、腕や足をつついては、クスクスと笑つていた。

「もう少しだよ。この先にあるんだ。そしてね

「雨はさつきよりも勢いを増していた。

「そこにね、真美がいるから

あのとき、僕はなんて答えたの??

あのとき、僕は?

「会いたくない

僕は言った。

「どうして？」

「ちゃんと成仏して欲しいから」

「真面目に答えて」

「真面目に……」

「いいから、真面目に答えて」

真美はそう言つて僕をじっと見つめた。五秒間、真美に付き合つたかどうか僕は考えた。そして、ため息をついた。

「じゃあ、こうしよう。真美が死んでここからいなくなつた。僕は三日間ぼつとし、一週間泣きはらして真美のことをすっぱり忘れた」

真美は黙つて僕の顔を見つめていた。

「その後、僕はここで真美とした会話を思い出す。真美には忘れるなんて言つたけど、そんな簡単に忘れることがなくてできなかつた」

分かるだろ？」

「ここで会いたくないって答えないと、僕は妄想の中で生きて行かなきやいけないんだ」

「それはつまり、会いたいってこと?」

「さあ。ただ、幽霊の真美と会いたいとは思わないだうつね」

「つまり、会いたくない」

「そうなるかな」

そこは、三百六十度を森に囲まれた広場だつた。ずっと昔に作られたらしいくたびれた不細工なベンチが一つだけ真ん中に置かれている。それいがいにはなにもない、僕と浩太と真美しか知らない場所。

雨のせいで田の前はほとんど見えなかつた。僕は額の上に手を置いて、田を細めた。ずっと向こうに置いてあるベンチの輪郭だけがかるうじてもやのむこうがわから透けていた。

「じゃあ、こうしない?」

「なに?」

「会いたくないって言つたくせに、公平がどうしても私に会いたく

てたまらなくなつたとき。そのときは、私から会いに行くわ

「構わないけど、そのときは多分逃げ出すと思うよ」

「いいわよ。どこまでも追いかけてやるから」

分からなかつた。いや、分かつてゐる。理解はしてゐる。ただ、納得ができないだけだ。

もやの奥に見える輪郭。そこに座つてゐる誰か。

すべてのことには偶然も備わつてゐるし、必然も備わつてゐる。それを説明しようと言われたところで、そんなことは不可能だ。できることと言えば、物事の終わりに答えをつけることだけ。どうして？ と言われれば、さあ、と答えるしかない。

雨は何かに吸い込まれるように弱まつていつた。僕は額の上に手を置いたまま、ベンチから中途半端な距離を置いて立ち止まつた。

ベンチに座つてゐる誰かは、少し前かがみになつて、両手で頭を抱えていた。

顔は見えない。でも、今この状況でそこにいるのが真美以外の誰かである可能性を考えるのは僕には無理なことだった。

「真美？」

僕の声はわずかな雨音にかき消された。

僕の声が届いたとは思えない。それでも誰かは何かに反応したみたいに、ゆっくり顔を上げた。

真美だ。

真美だつた。僕の記憶の中にはうつじて残る真美。そこに足りないものをすべて付け足した真美が、僕と同じ場所に存在していた。

僕は訳が分からずベンチの前に歩み寄つた。真美は、なにも言わず少しうつろな表情で僕を見上げた。

「俺たちは、すべてじゃない一部の中で生きてるんだよ」

やがて、真美はうつろな表情のまま僕を見つめると、少し首を傾げて眠そうな声を出した。

「……公平？」

それはまるで、つまらないシユーティングゲームだった。

後から後から的に向かつて出てくる標的を、ただ打ち落とすだけのゲーム。標的から勝手に的に向かつてくるのだからこつちは、タイミングを計つてボタンを押すだけでいい。それだけで、標的は派手な音を立てて粉々に砕け散つていく。掘り返していくば可能性はいくらでもあつた。実は死んだ真美は同姓同名のそつくりさんで、本人ではなかつたとか。真美が死んだという旨のあの手紙は、真美の手の込んだいたずらだつたとか。後から後からそれらの標的は的に向かつて飛んでいき、僕はそのたびに射撃のボタンを押していた。

そんなわけない。全ての可能性はその一言で片が付いた。それでも、僕は真美が僕と同じ場所に存在している理由を探した。真美が僕と同じ場所に存在する以上、その理由は必ずどこかに隠れているはずなのだ。

僕はマグカップを二つ食器棚から取り出した。ゆっくり一つ一つの動作を確認しながら、五分をかけてココアを作る。

「大丈夫。僕は冷静だ。そう自分に言い聞かせて、テーブルにココアを入れたマグカップを二つ置いた。それから少しして、ガラガラ、ヒバヌルームから音が響いた。

「大丈夫。僕は冷静だ」

声に出して確認してみせる。

「うん。僕は冷静だ。」

ほとんど音を立てずに真美はキッチンに入ってきた。何の柄も入っていない赤色のTシャツに、Gパン。僕の用意した着替えを真美はそのまま着込んでいた。

「私には大きすぎるみたい」

そう言って、真美は腰までずれ落ちたGパンをさらにずれ落ちないように手で押さえた。

「あ、うん。そうだね」

大丈夫。僕は冷静だ。

「とりあえず、座れば。ココアいたから」

「うん。ありがとう」

真美はそう言つて、僕から離れた方の椅子に腰を下ろした。僕は流しの前に立つたまま、本人に気づかれないように真美を眺めた。真美はマグカップを両手で包み込んで、ゆっくり口に運んだ。そして、一口だけ飲むとマグカップをテーブルに置いて、困ったような顔を僕に向かた。

「どうかした?」

一応聞いて見る。すると、真美は小さく笑つて

「味見した?」

と声を出した。

「いや、していないけど」

「じゃあ、してみて」

真美の言いたいことがよく分からず、僕はマグカップを手にとつて口に運んだ。僕ののどを静かに暖かい液体が通過した。そして、僕は顔をしかめた。ダイレクトに真美の言いたいことが伝わってきた。

「 ire直すよ」

「いいよ」

「でも」

「いいから、シャワー浴びてきて。そのままじゃ風邪引いちやう」

真美は立ち上がるときの手からマグカップを奪つた。僕は流しに向かう真美の背中を見ながら、自分がそういうえば濡れたままだったことを思い出した。

「うん」

僕は言った。

大丈夫。僕は冷静だ。 二十分。熱湯を浴びながら僕はひたすら自分に言い聞かせた。大丈夫、僕は冷静だ。毎日ココアを飲ん

でるからって、時にはうまくこれられないこともある。ちょっとした手違いでほとんど味がしないものができあがつただけのことだ。

大丈夫

キツチンをのぞくと、椅子に座つて真美がマグカップを口に運んでいた。しばらく、顔だけを出してその様子を眺めていると、不意に真美は

一座<sup>シテ</sup>たら<sup>タラ</sup>」

視線は僕をとらえてはいなかつた。でも、独り言  
と言葉を発した。  
には聞こえない。

心事、氣持をつかう

タオルの上から頭をかきながらギッチャンに入る。これだけは  
けた演技を素知らぬ顔で実行できる人間がこの世界に何人いるだろ  
う？

どりあえず座れば二二元いれたから

「ちがう。ちがう。」  
眞美にやがて、  
「僕を見

真美と向かい合つて椅子

し薄めの甘味が口の中に広がつた。

二十分

一  
え?  
」

僕は顔を上げた  
真美は「ややかま」を両手の中にしれたまま

新編 一月の書

「業は今静ぎよ。」

「分かつてる。ただ、落ち着かないだけだよね」

落ち着かない。僕は真美の瞳から逃れると、乱暴にタオルで頭をかいた。

「うん。」

「うん、そうだよ。どうせならそうみたいだ」「無理しなくていいよ。落ち着かないなら、

八田山

「じゃあ、どうじゅうて言うの。手放しに再会を喜べって？」

そんなの無理だよ。僕は呟いた。

「なんなんだよ、一体」

わけの分からぬ感情が急に僕の中で膨らんでいた。僕は椅子から立ち上がり、真美に背を向けた。

「四年前、真美は僕と浩太の前から勝手にいなくなつた。勝手にいなくなつて僕たちの知らないところで勝手に死んだ。僕たちは真美の勝手に振り回されて、突然一度と会えなくなつたんだ」

そんなことが言いたいわけじゃない。それでも、一度出た言葉は止めようもなく出口をさまよつていた。

「真美は四年前に死んだんだ」

僕は自分に言い聞かせるように言ひて、真美と向かい合つた。

「中学一年生の夏。真美は僕と浩太の前からいなくなつて、それからもう一度と会えなくなつた」

それでも、真美は僕の目の前にいる。

「教えてよ」

「これは夢なのか？」「どうして真美がここにいるんだ」

「それとも現実？」

「ごめんね」

真美の小さな声が僕の耳に響いた。

「え……」

「公平のこと、混乱させるつもりはなかつたの」

「……」

「私にもね、分からぬの」

「分から、ない？」

僕と目が合うと真美はうん、と呟いて目をそらした。「なにも分からぬの。どうしてあそこにいたのか、どうやってあそこにいつたのかも。気がついたら私はあそこにいて、独りぼっちであそこに座つてた」

真美はマグカップを手の中で弄びながら、テーブルの端っこを

見つめていた。僕は真美の手の中で不器用に踊るマグカップに目を見落とした。

「なにも分からないの。冷たくて、不安で、なにも分からなかつた」  
マグカップは真美の手の中で踊るのを止めた。顔を上げると、  
真美は僕を見ていた。

「でも、誰かが私を呼んだ。そして、公平が私の前にいた」

「真美」

「まるで、お化けでも見てるような顔してね」

「……」

あのとき、僕の声が真美に届いたとは思えない。それでも、真美が誰かに呼ばれたというのなら、それは予感のような限りなく正確なものを感じたからなのかもしれない。そして、僕もその予感のようなものに引き寄せられてあそこに立っていた。

「「めん」

僕はそう呟いて椅子に座った。

「あんなこと言つつもりはなかつたんだ」

「謝るのは私の方だよ」

「え？」

「だつて、言つつもりはなくともあれは公平の本心でしょ？」

別に見透かしてるわけじゃないと思う。真美は僕の言葉を聞いて感じたことをそのまま口にしているだけだ。 真美は無理に唇をゆがめて笑みを作っていた。多分、僕も同じような顔を真美に向けていいると思う。

「うん」

僕は肯いて言った。

「でも、言つつもりはなかつた。そんなこと言つても、もう時間は戻しよいがない。それに、そのおかげで僕と浩太の負つた傷は最小限で済んだ」

「でも、私のせいで傷つけたわ」

真美はそう言つて唇をかんだ。

沈黙の中で僕はかけるべき言葉を探した。真美がそのことで責任を感じるなんて、そんなの間違ってる。でも、僕にそれを言葉に代えることはできなかつた。

「違う」「

真美は泣きそうな顔で僕を見つめた。

「そうじゃない」

「そうでしょ？」

「真美のせいじゃない」

「ずっと謝りたかった」

「いいよ」

「ごめんね」

「ずっと謝りたかった。それは僕の台詞なのに。」

「謝るなよ。誰かが謝るようなことじゃないだろ」

「そうだね……」

分かつてゐる。真美はそう咳いて立ち上ると僕に背を向けた。その後に、頬を一度拭つたことには気づかない振りをして、僕は言った。

「とりあえず、今の僕は落ち着いてるし冷静だよ」

もう一度頬を拭つて鼻をすすつてから、真美は僕に顔を向けた。「だから、一番最初に言い忘れたことを今言つとくよ」

「言い忘れたこと？」

「久しぶりだね、真美」

久しぶりだね。真美はうつむいて、確かめるように咳いてから顔を上げた。

「なんか今、すごく懐かしいって気がした」「

「だろうね」

なんせ、僕たちは四年も顔を合わせていなかつたのだ。僕たちの再会にちょっとした手違いと間違いがあつたにしても、懐かしいことには何の問題もない。

「僕もそうだよ」

そう言って僕は真美から田をそらした。  
時計の針はだるそうに規則正しい音を奏でていた。

少ししてから、美咲さんがカレーをタッパーに入れて届けにきてくれた。なるべくいつもどおりに振舞う努力はしたつもりだつたけど、それが上手くいった自信はなかつた。

「あれ？」

そう言つて、美咲さんが真美の靴に気づいたときには、僕の心臓は口から飛び出しそうになつていたし「もしかしてお邪魔だつた？」と耳打ちされたときには、危うく、ひっくり返りそうにもなつっていた。

「どうしたの？」

もし美咲さんにそう聞かれいたら、僕は本当のこと話を話し出していたかもしない。でも、美咲さんは不思議そうな顔で「大丈夫？」と声をかけて、僕が首を縦に一回振るのを確認すると、何も追求せずに自分の部屋に帰つてくれた。

「別に、指名手配中の凶悪な殺人犯をかくまつてるわけじゃないでしょ？」

キッチンの影から僕と美咲さんのやり取りを見ていたらしい。僕がキッチンに入つてくるなり、真美はそう言つた。

「だからだよ」

僕は不機嫌に声を出して、椅子に座つた。

「どういう意味？」

「ここに座つてる未確認生物と顔を合わせれば、指名手配中の凶悪な殺人犯も裸足で逃げ出す。ってことじやない？」

「こんなかわいい女の子の子なのに？」

「こんなかわいい女の子の子なのに」

同じ口調で言つてやると、真美は不満そうに頬を膨らませてから、

ぺろつと舌を出した。

「失礼しちゃうわ」

僕はため息をついた。

確かに、父さんは真美のことが好きだったし、真美も父さんのことが好きだった。別に、それはそれでいいと思つて、文句を言つつもりはない。

でも、さすがにそれはないと思う。

久しぶりだね。そう言って抱き合つ一人を眺めながら、僕は思つた。

「いやあ、本当に久しぶりだ。ええ、なあ」

「うん、おじさん」

真美はそう言うと、父さんの胸から顔を離した。父さんも真美から離れると、うん、うん、と何度もうなずいてから、真美の顔をまじまじと見つめた。

「まさか夢でしたってことはないだろうな

真美は首を横に振つた。

「私にも分からぬの。でも、夢じゃないみたい」

「そうか。うん、そうか。なに、気兼ねせずにゆっくつしていくといい」

「ありがとう、おじさん」

それは、順序を無視した、限りなく不自然なやり取りのはずだった。少なくとも、普通なら、死んだはずの人間が目の前に立つていれば、いきなり「久しぶり」とはならないはずだ。つまり、それはないだろと思いながら、父さんと真美のやり取りが、ごく自然なことで、それが当たり前のように見えてしまつていて、さらには死んだはずの人間に「久しぶり」とこの二人と同じように言つてしまつている僕は。

つまり、なんなのだろう?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4826a/>

---

君が還る場所

2010年10月17日02時33分発行